

ジブチ～「連帯」の思いが紡ぐ縁と絆～

在ジブチ日本国大使館

ジブチでは、毎年3月11日、JICA 帰国研修生同窓会の企画により、ジブチ市内の東京広場（※）において、東日本大震災の追悼式典が催されています。ゲレ・ジブチ大統領が、東日本大震災の発生を受け、2011年3月23日を「日本国民との連帯の一日」とし、同日、東京広場にて約800人が参加する大式典を開催したことがその起源となっています。

ジブチでは、震災直後に国民から多額の寄付金が集まり、2012年4月にアライタ・在京ジブチ大使から南相馬市に対し義援金という形で寄付金の手渡されました。

こうして結ばれた縁により、ジブチは、南相馬市の「復興『ありがとう』ホストタウン」事業の対象国として選ばれ、2020年オリンピック・パラリンピックに向けて交流を深めることとなりました。

2018年には、ジブチと南相馬市との間で相互訪問交流が開始され、同年7月にジブチからは8人の小中学生が南相馬市に招待され、彼らが日本の伝統文化、日本人の心に触れる機会が生まれました。

ジブチは、日本の四国程度の国土面積に約100万人が住む比較的小さな国です。そのため、国民同士の距離も近く、ジブチ人にとって「連帯」という言葉はとても重要な意味を持ちます。

日本はジブチの独立以降、ジブチが内戦で苦しんでいた90年代も含め、途切れることなく援助を続けてきました。ジブチ国民の中にはこれに対する感謝の気持ちを忘れることなく、今なお日本に特別な「連帯」の思いを寄せている方が多くいます。日本とジブチの間には飛行機で約20時間の距離がありますが、こうした思いと行動の積み重ねが国を超えて日ジブチ間に強い縁と絆を築いています。

（※）90年代後半に日本の援助によって整備された主要道路の起点となる広場であり、「日本国民との連帯の一日」の機会に「プラス・ド・トーキョー（東京広場）」と命名された。



東日本大震災追悼式典 (2018 年 3 月 11 日)「復興『ありがとう』ホストタウン事業」
(2018 年 7 月) (写真提供 :南相馬市)